

闇夜の 灯火

No.4

コロナ禍という「闇夜」のなか、
心を照らし、心の免疫力を高めてくれる
作家たちが紡ぐ言葉の数々

ぼくは意地悪どころか、結局、何者にもなれなかった——意地悪にも、お人好しにも、卑劣漢にも、正直者にも、英雄にも、虫けらにも。かくていま、ぼくは自分の片隅にひきこもって、残された人生を生きながら、およそ愚にもつかないひねくれた気休めに、わずかに刺戟を見出している。
(ドストエフスキー<江川卓：訳>『地下室の手記』より)

人を喜ばす事は悪い事ではない。自分は当然、ある喜びを感じていいわけだ。ところが、どうだろう、この変に淋しい、いやな気持ちは。
(志賀直哉『小僧の神様』より)

アア私は働きたい。けれども私を使って呉れる人はない。私は工場で余り乾いた空気と、高い温度と綿屑とを吸い込んだから肺病になったんだ。肺病になって働けなくなったから追い出されたんだ。だけど使って呉れる所はない。私が働かなければ年とったお母さんも私と一緒に生きては行けないんだのに。
(葉山嘉樹『淫売婦』より)

そのような他人の誤りを正したところで、別に大した役にもたちはしないし、この世の中にいかほどの変化もでてきはしないという、いつもの彼の思いが、彼の心を占めていたのである。もっともその頃すでに彼自身、学問や思想に対する熱情を失ってしまっていたのであった。というよりも学問や思想は、何一つ自分を（自分の生命を）生かしはしないという風に彼は考えていたのである。
(野間宏『崩解感覚』より)

財といふものは誰でも愛して、皆獲やうと念うとる、獲たら離すまいと為とる、のう。その財を人より多く持たうと云ふぢやもの、尋常一様の手段で行くものではない。合意の上で貸借して、それで儲くるのが不正なら、総ての商業は皆不正でないか。学者の目からは、金儲する者は皆不正な事をしとるんじや
(尾崎紅葉『金色夜叉』より)

俄かに荒々しいものが、疾風のように私の心を満たした。此のような犠牲をはらって、日本という国が一体何をなしとげたのだろう。徒労と言うには——もしこれが徒労であるならば、私は誰にむかって怒りの叫びをあげたら良いのか？
(梅崎春生『桜島』より)

「仕事はゲームだと思え。真剣に遊ぶゲームだ。いつもうまくいくゲームなんかつまらないじゃないか。成功七割、失敗三割。そのくらいの人生のほうが絶対に楽しいぞ。おれだってそう
(池井戸潤『かばん屋の相続』より)

闇夜の 灯火

コロナ禍という「闇夜」のなか、
心を照らし、心の免疫力を高めてくれる
作家たちが紡ぐ言葉の数々

彼は日がな一日穴のなかに身をふせ、夜は夜でおちおちねむられず、ひとかけらの食物も呑みこまず、間がな隙がなこう考える。「どうやらわしはまだ生きているらしい！ ああ！ だが明日という日はいったいどうなることやら？」

(サルトウイコフ・シチェドリン『賢明なスナムグリ』より)

多田も子どものころに、よく駄菓子を買いにきた。だが、夜に仲通りを訪れるのははじめてだった。

路地に面した店は、すべてシャッターを下ろしている。煤けたアーケードからは、月も星も見えない。クリスマスを意識したらしい金と銀のモールが、アーケードを支える骨組みに這い、吹き抜ける冷たい風に揺れていた。

(三浦しをん『まほろ駅前多田便利軒』より)

それにまた、忘れないでくださいよ、あなた、すすんで幽閉されるのは強制されたのよりはるかにつらいつてもね。ほんとうはいつでも自由の身になれるんだと思えば、独房で居ても立ってもいられないでしょうからね。

(アントン・チェーホフ<松下裕：訳>『賭け』より)

百年目の青空。

だからって、それがいま見ているこの空とそれほど変わっているとも思えない。いつもと同じような空だ。どこといって変哲のない空。なにも落ちてこないし、なにかが飛ぶこともない。どこまでも青い。いやになるほど青い。人をばかにしたような青空だ。

(宮沢章夫『よくわからないねじ』「百年目の青空——あとがきにかえて——」より)

もし、この世に生きている人々の体温が、いまより一度ほど上がったとしたら、世界はどんなふうに変わっているだろうか。

人間の平均体温が、三十六度前後でなく、三十七度前後の、微熱でよどんだ体温だとしたら、世界の政治や経済は、ずいぶん変わったものになっていたかもしれない。

(渡辺淳一『公園通りの午後』「微熱のなかで」より)

「はやくお入りなさいよ」

「それもいいが……」

言い差して、「何のためにここに来ているのか」と彼はふたたび自分に問いかけた。「終わった、ということを確認しようとして来ているのだ」と答えてみたが、それは弁解のように聞こえてきた。この 審あなぐらのような部屋がいけないのだ……。 (吉行淳之介『砂の上の植物群』より)

闇夜の 灯火

No.2

コロナ禍という「闇夜」のなか、
心を照らし、心の免疫力を高めてくれる
作家たちが紡ぐ言葉の数々

《自然の征服》——これは、人間が得意になって考え出した勝手な文句にすぎない。生物学、哲学のいわゆるネアンデルタール時代にできた言葉だ。自然は、人間の生活に役立つために存在する、などと思いあがっていたのだ。

(レイチェル・カーソン<青樹築一：訳>『沈黙の春』より)

親の目つき、顔つき、笑い方、泣き方、怒り方、話し方、聞き方、黙り方、驚き方、けんかの仕方、仲直りの仕方、こうした他の人間や事物に対する反応を空気のように吸って子どもたちは成長していくのでしょうか。ということは、幼児の脳に届くような刺激は、とってつけた言葉や知識ではなく、親の頭脳と性格と態度をふくむ生き方すべてだということです。

(川上源太郎『親の顔がみたい』より)

要するに、誰が犯人だか、見当がつかないらしい。そして、要するに、誰が犯人でもかまわないような変テコリンに無関心な時世が到来したらしいのである。戦争という大殺人の近づく気配が身にせまっているせいかも知れない。シリメツレツは今や全ての物についてそうであるのかも知れない。

(坂口安吾『影のない犯人』より)

バッハの人間理解に深さが感じられるのは、彼が人間の概念を、いつも人間を超えたものとの関係においてとらえているからではないだろうか。

(礒山雅『J・S・バッハ』より)

はるばる南京から、ぼくたちが背のうにいれてはこんできた岩塩は、大隊本部で一カ所に集められ、そして棄てられた。

長い行軍のあいだに、何度も、背のうのなかまでずぶ濡れになり、岩塩の塩気がぬけて、ただにがだけの石ころに変っていたのだ。

(田中小実昌『浪曲師朝日丸の話』より)

だから今話すことを聞いてくれたなら、お前の胸も幾許か晴れよう。また私は、お前にそれを心のありったけ話し尽したならば、私の此の胸も透くだろうと思う、そうでもしなければ私は本当に気でも狂れるかも知れない。出来るならば、手紙でなく、お前に直に会って話したい。けれどもそれは出来ないことだ。それゆえ斯うして手紙を書いて送る。

(近松秋江『別れたる妻に送る手紙』より)

闇夜の 灯火

コロナ禍という「闇夜」のなか、
心を照らし、心の免疫力を高めてくれる
作家たちが紡ぐ言葉の数々

正義が尊ばれるのは人間生活の中でそれが極めて少ないからで、世界は不正や暴力で充満しているんだ、正しい生き方は大なり小なり悪との闘いのうえにある、その闘いから逃げることは自分で自分の生存を拒むのと同様だよ、そう思わないか
(山本周五郎『寝ぼけ署長』「毛骨屋親分」より)

しかし、コンピュータリゼーションが発達し、ロボット化が進むのに比例して、オフの時間がどんどん長くなっていくことには歯止めの方法がない。そうすると人間にとっては、与えられた空白の時間の膨大な量に立ち向かうことの方がむしろ「仕事」になってくる。(中島らも『ビジネス・ナンセンス事典』「お……オフ」より)

ただ、一さいは過ぎて行きます。
自分がいままで阿鼻叫喚で生きて来た所謂「人間」の世界に於いて、たった一つ、真理らしく思われたのは、それだけでした。
ただ、一さいは過ぎて行きます。(太宰治『人間失格』より)

顔のまえに手をひろげてみた。手を透して街が見えた。振り返って見ても、やはり街は透き通っていた。街ぜんたいが生き生きと死んでいた。誰が生きのびられるのか、誰が生きのびるのか、ぼくはもう考えるのを止めることにした。
(安部公房『方舟さくら丸』より)

あの、炊きたての真っ白な飯が、ぱっと蓋を取った下から煖かそうな湯気を吐きながら黒い器に盛り上がり、一と粒一と粒真珠のようにかざやいているのを見る時、日本人なら誰しも米の飯の有難さを感じるであろう。(谷崎潤一郎『陰翳礼讃』より)

「世の中に片付くなんてものは殆んどありやしない。一遍起った事は何時までも続くのさ。ただ色々な形に変わるから他にも自分にも解らなくなるだけの事さ」
(夏目漱石『道草』より)